

危殆度不可愈。亦移居外氈帳房」云々とも見えて居る。兎も角或る程度まで燕京に於ても帳房の用ゐられて居つたことは疑無い。葉子奇の草木子雜制篇には、「元君立。別設一帳房。極金碧之盛。名斡耳朵。……新君立。復自作斡耳朵」と見えて居る。これは元君とはいふものゝ、漠北時代の風俗を記したものであらうと思ふ。

②⑦ 此の記事は嘗て桑原博士によりて引用せられ（東洋史說苑所載、支那人辮髮の歴史参照）、元代の漢人が辮髮・胡服して居つたことの證左に供せられたが、その胡姓を稱し胡語を習つたことについても、前人の説く所を更に補證するものである。

②⑧ 趙翼二十二史劄記卷三十、「元制百官蒙古人皆爲之長」の中に、「然中葉後漢人爲之者亦少」といふて、元朝の初葉には平章政治・左右丞・參知政事に任ぜられたものもあつたが、中葉以後にはこれも少いことをいひ、中葉以後漢人に對する待遇が益々薄くなつたことを述べてゐる。箭内博士も、「英宗以後、漢人にして怯薛に官たりしものを見る能はず」といひ（元代社會の三階級、第四七一頁）、また「南人は世祖の時には略ぼ漢人と同等の待遇を受けしが、……其の後漸く排斥せられ」しことを論證した（同上、四八七頁）。

②⑨ Pelliot, *Les inscriptions du Chan-tong*, J. A. 1913 Juillet-Aout. 參照。

③⑩ 狩野博士の「元曲の由來と白仁甫の梧桐雨」（支那學文叢所收）中にも、元曲の由來に關する沈德符を初め明人等の唱へた説、即ち元代科學に填詞科を加へた結果であるとする説の妄を辨じ、これを以て當代學術の尊敬されなかつたが爲と、また異姓の臣となるを慙ぢた隱士奇人等の、才を狂言綺語の間に費やすものがあつた爲であらうと論じてある。時代に發憤して起つたと見る考は李贄の讀忠義水滸傳の序にも見えて居る。ただ箭内博士は當代漢人壓迫の事實は然く激しいものではなかつたといふ考及び、漢民は度々の事變に遭遇して華夷の別を重視しなかつたらうといふ考から、當代漢民が格別不平を抱いて居つたものでないとし、この説に反對した（元代社會の三階級）。一般人が政變に馴れ、華夷の別を重んじなかつたことは、必ずしも此の時代に限らず、常に支那に於て認められる現象であるが、苟くも有識の士がかゝる時代に直面して心中不平を藏するなく、また華夷の別を重視しなかつたとは史觀の上から余輩の同ずる能はざる所であり、また事實の上からも必ずしもこれを證するに難くはない。しかし今はこの點について論及しない。（狩野教授還曆記念支那學論叢、昭和三年二月）